

# 核シエルトーという文学空間

——『レベル・セブン』・『洪水はわが魂に及び』・『方舟さくら丸』——

中野和典

## 序

極限状況における人間の姿を描くことを通じて何かを可視化させるという物語の方法がある。飢えや寒さなど、生命を脅かすほどの状況に人間を置き、いかに普段とは異なる行動をとるかを描き出す物語。そのような状況における非日常的な姿が、日常生活を送っていたときから潜在していた「人間の本性」を露見させるという物語。極限状況における人間の姿が、「人間の本性」と言えるような中核的なものであるのかということは問わないにしても、そのような物語が人間のある重要な側面を可視化させる機能を持つていることは確かだろう。

戦後、冷戦の激化にともなって核兵器が質・量ともに増強される中、核シエルトーを舞台とする物語が多く書かれるようになった。核攻撃に対抗する防衛手段としての核シエルトー。それは人間が核戦争Ⅱ世界の終りというべき究極的な破壊に向かい合い、格闘する場である。そして核戦争による破壊が、人為的かつ組織

的に生み出される究極的なものであることよって、それに対抗する核シエルトーも他のいかなる極限状況とも異った性質を持つ場になっている。核シエルトーの表象を通じて、どのような人間の在りようが前景化されているのだろうか。本論では、まず、核シエルトーをめぐる社会的な背景に注目し、核シエルトーという場が成立する背景について考察する。続いて、核シエルトーの物語に重ねられる方舟のイメージに注目し、核シエルトーという文学空間の機能について考えてゆくこととする。

## I 核シエルトーの誕生

核シエルトーが作られる背景に、核兵器の増大<sup>1)</sup>があったことは言うまでもないが、核攻撃への防備は、常に核開発の速度に追いつかない形で増強された。例えば、核開発/核防衛の最先端を突き進んできた米国の状況については、次のような報告がある。

一九四九年のソ連最初の核実験に対応して一九五〇年の連邦民間防衛法が成立して以来、民間防衛に対するアメリカの態度は矛盾に満ちたものだった。事実、アメリカの民間防衛の多くは、入念に考えぬかれた計画の一部というより、外的要因に対する反作用に過ぎなかった。「緊急対応」計画も、避難ルート計画も、ともに一九五〇年代初頭の計画であり、ソ連の有人爆撃機で運ばれる原爆による攻撃に対応したものである。火災と爆風に対して適切な防護がないため、ソ連の爆撃機をレーダーがとらえてから爆撃機が到着するまでの数時間の間に都市住民が緊急避難するための計画になってい

る。

一九五三年のソ連最初の熱核兵器（水爆）実験は、これらの計画の変更を余儀なくさせた。これらの核兵器は核出力が非常に高いため、都市における近距離避難や中程度の強さの爆風防護シェルターは住民を防護するのに効果はないし、単に学校の廊下にもぐり込むという程度では、何もしないよりましとしても、真剣な民間防衛計画の一部ではないということになったのである。（略）

大陸間弾道ミサイルの出現は、さらに変更をうながした。警戒時間が大幅に短縮されたので、レーダーの攻撃警報と同時に避難することが不可能となった。

兵器技術の進歩によつて以前の計画が役にたたなくなつたので、アメリカはそれにとつて代わる計画を探した。爆風から完全に住民を防護できないことは認めながらも、一つのアプローチは放射能隔離シェルターを確認し、かつ十分用意しておくことだった。（略）一九七一年会計年度中に約一一万八〇〇〇の建物がシェルターに指定された。約九万五〇〇〇の建物はシェルターとなりうることを確認されたが、指定はされなかった。危機的状態になれば、指定が行なわれるであろう。一九六〇年代の初め、連邦政府はシェルター用に最低限の生存に必要な物資を購入した。これらの物資の保存期間はすでに切れている。危機の間にシェルター用の仕入れを完了しておかなければならない。

米国の核防衛は、常に核開発の後手に回っていた。これが防衛政策の杜撰さずさんさによるものなのか、核開発の速度の異常さによるもの

なのか判断は難しい。このような米国の状態を受けて、日本でも核シェルターが注目されるようになる。まず、そのアウトラインをとらえるために、「朝日新聞（東京版）」を中心に核シェルターに関する記述の変遷を見ることにする。最も早い時期に登場した報道は次のようなものであった。

はじめてニューヨークを訪れたときのことだった。どのビルディングにはいっても、地下に「シェルター」（避難所）の文字があるのに気がついた。文字があり、矢印がある。

はじめはなんのこともよくわからなかった。コトバの意味はわかっているのだが、それでいてどうもピンと来ないのだった。それが、ふとした拍子に、わかった。わかりすぎるくらいわかった。「防空ゴウだ」私は自分に行つた。

はなやかな大都会ニューヨークのどまんなかで、あのふるい、いまわしい記憶がよみがえつて来た。防空ゴウの底にはいつくばつてふるえていた少年時代の記憶——「今は平和の時代なんだな」私はそう思った。平和の貴さを、いまさらのように実感として感じ取つたと言つてよい。

このこと、「平和の貴さを実感として感じる」ことは、思ったほど容易なことでないのかも知れない。アメリカにいたとき、一部のアメリカ人の勇ましい言動にふれるたびごとに、私はそう考えた。いや、他人ごとではない、私たち日本人だつて——たとえば私自身にしてからが、あの少年時代の防空ゴウの記憶がなければ、「シェルター」の文字もなんのこともなく見すごしてしまつていたのにちがいないのだ。

今の世界に必要なのは「危機感」ではなくて、こういう「平

和意識」なのだろう。危機感から出発する消極的受け身な平和は、せいぜい、軍拡、核実験再開に結びつくのが関の山なのだ。世界の人間は、いま一度、「平和の貴さ」を積極的に考えてみてもよいのではないか。私たち日本人の場合で言えば、たとえばこの日本から（そして私たちの心から）「シエルター」の文字が消え去って年久しいのだが、いま必要なことは「危機感」にあおられてふたたびその文字を自分の心に刻みこむことではなくて、永久にその文字をもたないように積極的に動いて行くことなのであろう。（小田 実）

（きのう きょう 「シエルター」の文字「朝日新聞」一九六一年一〇月二日）

核シエルターは米国での見聞として紹介されている。一度、防空壕に置き換えて語られていることに、核シエルターに対する馴染みの薄さをうかがうことができる。核シエルターに依存するような意識が、核兵器を前提とする危機感を煽り立て、軍拡を容認することにつながる危険性があると指摘は鋭い。このように、核シエルターについての報道は、米国の状況を報告する形で始まった。

“今年の夏突然に……”ワシントンにシエルター（退避ゴウ）ブームがやって来た。正確には、ブームが全米をおおったというべきかも知れないが、ベルリン危機と米ソ核実験再開以来、戦争の脅威を一番身近に感じ出したのは、何といつても政府のおひざ下、ワシントンのようだ。（略）

ワシントンにある全米民間防衛本部は、この七月まで閑散としていた。それがベルリン危機以来問い合わせ殺到で、て

んでこ舞い。なにしろ電話の問い合わせが日に五百以上、手紙は全国から何千通。これまでホコリをかぶっていた「家庭シエルターの手引き」というパンフレットがこの二カ月で何と三百万部さばけたという。

いまワシントンの全米住宅センターに陳列されているホーム・シエルター（家庭用待避ゴウ）の模型も大変な人気で、係りの話したと、余りたくさん見に来るので数えるのはやめたそうだ。しかも一人平均二、十分はその前を動かさないという。値段は五百ドルから三千ドルぐらい。たかだか三十七センチか六十七センチの厚さで何が防げるか、などといった疑問は日本人以外は余り持たないらしい。

説明書には、わざわざ「原爆経験者である日本人は運命論者になってしまい、水爆戦争の準備を何もしていない。だが、この態度は間違っている」と教訓を垂れてある。

もつとも、さすがにこれで直撃弾、至近弾を防げるとは思っていないようで、爆心からかなり離れて生き残った場合、放射能の危険の薄らぐまで退避するためのもの、としている。だから中に必ず二週間分の食物と飲料水を入れることになっている。

大家族ともなると、その準備だけでも大変だ。だからもし“よけい者”がはいったりすると食いつなげなくなるといっているので、シエルターを作ったことを秘密にしている家が多く、当局を弱らせている。つまり核戦争がはじまった時、自分のシエルターには、他人を入れてやらない、というのだ。

これが新聞の投書欄をにぎわし、シエルターが原因でこれ

まで仲のよかった隣同士のつき合いがうまく行かなくなつたなどという深刻な話も出ています。

（「世界の窓 シェルター・ブーム ワシントン」『朝日新聞』一九六一年一〇月二二日）

核攻撃を受けたとき、人々が殺到することを恐れてシェルターを隠す人々。核シェルターは例外なく排他的な場となる。初めの報道は、米国や英国<sup>3</sup>といった核防衛「先進国」と日本との格差が際立つものになつていゝ。しかし、次第に日本国内でも核シェルターの必要性が検討されるようになる。

防衛力増強論に呼応するかのようによ、政府、自民党内で核戦争や大災害に備えるシェルターの建設などをめざす「市民防護」の考え方が広がりはじめていゝ。昨年暮れ、自民党安全保障調査会に市民防護小委員会（小淵恵三委員長）が設置され、「行政サイドで問題を取りあげるべきだ」との注文が強まつたこともあつて、総理府も審議室を窓口にして検討を開始することを決め、「日本市民防護協会」（事務局長・福富繁元陸将）の法人認可申請を受け付ける構え。ただ、この話、ソ連脅威論をおおる可能性があり、野党内から反発も必至であり、総理府もまだ及び腰だ。（略）

小淵委員長らは、政府に窓口が設けられたことを「一歩前進」と評価しているが、小委員会メンバーの間で「市民防護」についての認識がまちまちなため、当面は、外国の視察を行うなど調査活動を続けるとともに、PR活動を進める。民間団体の市民防護協会が法人として認可されれば、次の段階として政府に対し本格的なスタッフをそろえ、しっかりとした研

究態勢をとるよう要請する方針だ。

（「核戦争のシェルターづくり 自民推進、政府も窓口」『朝日新聞』一九八一年三月二日）

政界で核シェルターによる市民防護への関心が高まつていゝ報道に続いて、個人的にシェルターを建造することが増えてきたことを報じる記事も見られるようになる。

核シェルターは欧米で約三十年前から開発され、普及した。それが今、日本国内でも相次いで建造されている。緊張する国際情勢への敏感な反応らしい。政財界の一部の人々は早くからひそかに造つていたといわれていゝが、五十三年には設計・施工管理を請け負う専門会社が現れ、受注第一号の神戸市の医師宅の二十五人用は五十五年二月に完成した。続いて静岡県袋井市の食品会社（百人用）、東京の警備保障会社（五十人用）、今年に入つて京都のホテル（三千人用）、大阪、大阪の会社役員宅、医師宅（各二十五人用）など二年間で計十件。さらに二十四、五件の注文が来ている、といゝ。

テントやコンテナを生産している大阪市淀川区の太陽工業は年内に事務所を改築するが、地下に二百人収容のシェルターをつくる計画だ。（略）

京都市右京区、臨濟宗妙心寺の北門に近い塔頭（たっちゅう）金牛院は五十九年夏の完工をめざし、来年から本堂を改築する予定だ。（略）

これらのプランや施工管理を一手に引き受けている東京都杉並区、植村技術研究所は地下道の設計などに長い実績をもつていゝ。植村厚一社長（六三）の話では、シェルターを

手がけだした当初、まだ世間の関心は薄く、親類の人たちからも「気は確かかな」と冷やかされたほどだった。ところが去年十月から「核戦争、原発事故に備えて耐核シェルターを」と、キノコ雲のイラスト入りの広告を建築雑誌に出し始めると、問い合わせ電話が殺到し、いまは月に約二百件。イラクからも千五百人用など三基の注文を受けた。

同社が家庭向けに開発したばかりの三段ベッドつきホーム・シェルター（五百万円）は、「広島型原爆なら爆心から四百メートル、一メガトン級の水爆でも、二・七キロメートル離れば十分防護できる」ことになっている。

### 個人用は秘密に

個人用シェルターは秘密裏につくられるのが通例だ。「当然です。収容力に限界があるのですから。私はたとえ恩師が来て入れません」。京都市左京区の自宅に新設を計画中の医師松元繁さん（五四）は割り切った口調だ。当人は民間防衛と核シェルターの普及運動をしている立場上、隠してはいないが、「暴力で入る者に対しては、欧米人のように射殺するくらいの気構えがある。そんなことにならずにすむように、今のうちにつくれ、つくれとみんなに勧めているのです」。外国のシェルターには、群衆の殺到を防ぐ機関銃の備えさえ常識になりだしているという。

### 幻想捨て反戦の世論を 豊田利幸氏（六一）

核爆弾がさく裂すると、瞬間的に三〇万度の高熱を発する。当然、大火が起り、シェルターはそれこそオーブンのようになって、中にいる人間は黒こげになるだろう。米ソなどは要

人用に堅固なシェルターをつくっているが、数多い市民用は核戦争に対し、なんら有効な施設になるまい。「生き残れる」という幻想を持たせ、より戦争を起しやすいつくりになっているだけだ。それが日本でも登場し始めたのは極めて漫画的なようでもあるが、被爆という耐えがたい経験に立脚した「核反対」の精神をゆがめる現象といえよう。核戦争拒否の世論強化こそが、唯一の完全なシェルターだと私は考える。

（名古屋大教授）

（核を見つめて ヒロシマ・ナガサキ三六年 シェルター 繁盛する請負業者 「冗談だろう」今や真剣に「朝日新聞」一九八一年七月二七日）

米国に遅れること約二〇年、日本でも核シェルターが秘密裏に建造されるため、正確な数は把握できないという状況が（ずっと小規模だっただろうが）、生まれつつあったことがわかる。記事末尾の主張には注目したい。核シェルターで生き残ることが技術的に困難であること、また核シェルターに依存することが、逆に核兵器を容認する状況につながってゆくことが指摘されている。先に引用した記事（一九六一年一〇月二日）もこのような主張で結ばれていたが、核シェルターに対する戸惑いや反対の声を示している記事は多く見られる。

しかし、核シェルターの数は増していったようだ。

米ソ両核超大国の間の核軍縮交渉が中断やむなきに至ったせいかどうか、日本でも核シェルターの買い入れを考える人びとがふえているそうだ。「サバイバル（生き残り）はまずOK」という欧州メーカーの言い分をうのみにするわけには

いかににしても、これが核戦争への恐怖の深まりあつての現象であることは疑いない。折から海の方こうでは米国テレビ映画「ザ・デー・アフター(その翌日)」が大変な話題で、日本では一月中旬に劇場公開される。シエルトアの売れ行きはこれを機にさらに伸びるのでは、と輸入業者はみるのだが……。

### ホテル地下に設置

(「核」問題取材班)

核シエルトアとは、核戦争ばつ発のさい核爆弾の熱線や爆風を避け、放射能のチリやガスを浴びずに何週間かを過ごす避難所のことだが、かこう岩の山をくり抜いたうえ堅固な耐爆ドアで遮断されたコロダドスプリングス近くの北米航空宇宙防衛指令(NORAD)のような何千人もの要員を収容できるものから、いま日本で売り出し中の家庭用(七人から十二人収容)まで、その規模はさまざまだ。

早くから核シエルトアの研究に手を染め、いま西独政府の規格に沿って独自のシエルトア設計を進めている東京・萩窪の植村技研工業(〇三―三九八―二二七八)の植村厚一社長の話では、五年前の数字で世界の常備シエルトアは米国で一億人分、ソ連が八百万人分、西独が二百万人分、スウェーデン七百万人分など。とてつもない数字だが、これはただの地下駐車場にすぎないようなしろものも含まれている。ただ、諸外国が官民友に核防衛に神経をとがらせてきたのは確かで、とくに欧州では家庭用が売れている。この時点で日本のシエルトアはゼロということになっていた。

植村技研工業が核シエルトアの設計を始めたのは五十三年

だが、最初に注目された仕事が国鉄京都駅前に建てられた京都センチュリーホテルだった。これは五十六年の完成。この地下一、二階のコンクリート壁を二十五センチの厚みにし、二重鋼に石綿を詰めた耐爆ドアをつくり、三千人が二週間を過ごせるという核シエルトアをつくった。残留放射能をシャットアウトするサンドフィルターなどの機器類の設置はまだだが、核戦争の危機が強まったときにいつでもとりつけられるよう手配はすんでいるという。

### 「秘密厳守」が条件

一般にはあまり関心が深まらなかった核シエルトアが国内で急な荷動きをみせたのは一昨年のこと、東京・白金台のアトムバンカージャパン(〇三―四七三―三四四八)と東京・銀座の大町トレーディング(〇三―五七―三二四一)の二社が欧州から家庭用シエルトアなどの輸入を始めたからだ。規模の大きなものでは神奈川県平塚市のゴルフ場で千二百人収容の工事が始まり、ある宗教団体が五千人規模のものをつくろうと、いまは設計の段階。

さて、そのシエルトアの数だが、アトムバンカーの伊藤竜男社長は「いま日本にある核シエルトアは不完全なものを含め七十基ぐらい」といい、植村社長は「いや百は超えるはずだ」と話す。

それぞれの推定がこんなに違うのは注文主が自分の家に核シエルトアをつくっていることを隠したがらるからだ。会社の重役、医師、土地成り金の都市近郊農家、日銭でふところ豊かなパチンコ店主といったところがお得意のようだが、その

ほとんどが購入の条件として「秘密の厳守」を持ち出す。隣近所に「あんたたちだけ助かるうとするのか」と白い目でみられるのを恐れるらしい。逆に「すわ核戦争というパニックのとき、縁もゆかりもない人間にシエルターに飛び込まれて浄化された空気をばくばくやられたり、備蓄の食料品を食い尽くされてはかなわん」とあけすけに語る人もいたそうだ。

「ザ・デー・アフター」にも家庭用シエルターにライフルを持ち込んで“外敵”を追い払おうと備えるシーンがあつたようだ。

というわけで、核シエルターの正確な数は依然不明のままだが、最近、建築基準法の制約にもかかわらず、苦心の工法で、地下室をつくる家庭がふえた、と業者はいう。コンクリート壁をめぐらして、耐爆ドアを取りつけ、空気清浄装置を買い入れれば、それですまずのシエルターになるわけだ。装置はスウェーデン、スイス、西独のものを輸入しなければならぬが、一式二百万円程度で手に入る。(略)

(核シエルター人気上陸 「ザ・デー・アフター」生き残りへ)  
「朝日新聞」一九八三年一月二三日)

核シエルター建造の増加を報じる記事は一九八〇年代半ばまで見られる。これらに先立つて日本の核防衛の遅れを指摘し、核戦争勃発時の具体的な対処法を記した書籍も刊行されていた。そして、一九八五年には核シエルターを舞台とする少年漫画・ひらまつつとむ『飛ぶ教室』が毎号数百万部を発行していた「週刊少年ジャンプ」(集英社)で連載された。このことも核シエルターへの関心の広がりを示している。一九八五年前後は、日本で最も

核シエルターが注目された時期であつたと言える。

その後、チェルノブイリ原発事故(一九八六年四月)の際に再び取上げられながらも、次第に核シエルターについての報道は見られなくなる。そして一九九〇年代初頭には、次のような記事が現れる。

「核の冬」の到来を恐れ、チェルノブイリ事故の放射能拡散におびえた一九八二年―八六年当時、個人での核シエルターづくりが、国内でも相次いだ。だが、旧ソ連崩壊で米ソの冷戦が終結して一年余、大国間の核戦争の危機は遠のいた。一時、普及するかのようになえた核シエルターは、物置に変わりはてたところがある一方、趣向を変えて「生き残り」を凶つているところもある。各地の核シエルターのその後を訪ねた。

(豊橋支局・伊藤 真理)

### 面影なく

東京都品川区の高級住宅街にある国立大学助教授宅の地下は広さ二十平方メートル余の核シエルター。旧西ドイツ製の空気清浄機を備え、二十センチ以上はある厚い壁と鉄扉二枚に囲まれた空間は、いま、物置になっている。

八三、夫人の父(故人)が新築時に地下室の一室として設けた。義父は旧海軍の技術将校で、関東大震災や東京大空襲を体験。放射能を防ぐだけでなく、大災害に備える目的だったという。六、七年前までは、故人の遺志を継いで、できるだけたくさんの方が入れよう、三段ベッドや非常食のほかは何も置いていなかった。しかし、ベッドの上には、いつのまにか寝具や衣類の荷物が増えた。今では助教も「清浄機

の使い方もよく分かりません」と話す。

## 応接室

兵庫県相生市の元市議会議員松林善三さん（八〇）の自宅核シェルターは、地下一、二階合わせて五十平方メートル。水槽もあり、十年ほど前に三千万円かけて設置した。地下一階は中央に応接セットが置かれ、流し、トイレ、エアコン付き。棚には無線機やラジオ、古いカラオケ装置もある。地下二階は倉庫兼休息室。

松林さんは十五年ほど前、スイスを訪れ、国の施策で家を新築する際に核シェルターを兼ねた地下室を設けるのが原則となっていたのを知った。国民の命を守ろうとする国の姿勢を日本でもまねてもらおうと、アピールの意味を込めて大金をかけた。しかし、かつては全国各地から訪れた見学者も、絶えて久しい。

## スナック

千葉県浦安市のJR新浦安駅そばの地下スナックパブ「地中船」は夜七時半過ぎに開店。厚い鉄扉と店内に陣取る空気清浄機が目につく。来年二月で開店から八年。万一の時のシェルター利用費を含めた入会費百万で募った特別会員は、十人まで増えた。最初の二年は会費などで非常食を購入したが、ここしばらくはストップ。年に一、二度空気清浄機の掃除をするぐらいという。

日本で核シェルターを扱う代表的業者といわれる植村技研工業（本社・東京都・国立市）へは、ここ二年ほど発注は少ない。植村厚一会長（七四）は「もうそろそろ核シェルターか

ら手を引こう」と考えている。「国民の命を守るために国に立ち上がってもらおうと頑張ってきたが、年を取りすぎてしまった」とあきらめの言葉をもらす。（略）

## 全国に二六〇カ所最大三〇〇〇人収容

植村技研などがまとめたデータによると、国内の核シェルターは約二百六十カ所。最大規模といわれるのが三千人を収容できる京都市の京都センチュリーホテルのシェルター。関西や神奈川県にも千人単位のものがあるが、五十人以下の規模がほとんどだ。地域別の数で見ると、関東、近畿、東海地方と続き、九州や北海道、四国には各数カ所しかないという。

（どうなった？核シェルター 危機去り今や物置 一方で専門会社）「朝日新聞」一九九二年一月一〇日

一九九〇年代に入ると、かつて核シェルターだった空間が単なる地下室として日常的な目的に利用されるようになっていく。この状況は日本に限ったことではなかったようだ。

以上のように、核シェルターは核戦争の危機感の高まりとともに人々の関心を集め、冷戦以後は「時代遅れ」のものとしてかえりみられなくなっていく。米ソの激しい核開発競争が過去のものとして語られる現在、核シェルター人気も時代を物語る一つの社会現象として人々の記憶から消え去ろうとしているように見える。

しかし、核シェルターについて思いをめぐらすとき、独特の違和感が残らないだろうか。核シェルターを作る人間の在りように、核兵器を作るのに劣らぬほどの深刻な問題を見いだすことができるのではないだろうか。



## 二 核シエルトの物語

方舟の比喩を用いて、核シエルトを描き出した物語は多い。モルデカイ・ロシユワルト『レベル・セブン』<sup>12</sup>（第七地下壕<sup>13</sup>）には、核戦争後、レベル3（第三地下壕）で生き延びた夫婦が、地下壕を抜け出して地上から他の核シエルト群に向かって世界の様子を電波送信してくるという場面がある。吐き気、嘔吐、発熱といった放射性障害を来しながら自動車の方々を見てまわった末に、彼等は次のように語る。

女、「あたしたちは二羽の鳩よ、ノアが洪水がひいたかどうかを見るためにとばしたのよ。」

男、「洪水はまだひいていない。水はふかい。わたしたちは帰らなかった鳩なのだ。」

女、「でもノアのところへ帰らなかった鳩は、洪水がひいたというしるしだったのよ。箱舟へよりつかなくかつた鳩は、いのちと希望のしるしだったのだわ。」

男、「ほんとうにお前のいうとおりだ、私の鳩よ！わたしたちはここにいます、地下壕の外に、すべてがおわるまで。この方が神の洪水よりずっとひどいからだ。人間は、この血の洪水をひきおこして、人間や鳩からすべての希望をうばってしまった。」

女、「地下壕の人たちよ、おききなさい。あたしたちの言うことをおききなさい。洪水はひいていません。毒はあななたちの体内に入ろうとしています。あなたたちの血はまだ赤い、しかし世界は真黒です。吸える空気のあるかぎり、深い

地中の水がある限り、精霊がおりて行ってひきずりあげるときまで、地下の人造の坑のなかにいらつしやい！」

男、「永久に箱舟からでるな！」（六月二八日）

核シエルトは方舟に喩えられているが、等価ではない。それは「男」の（人間は、この血の洪水をひきおこして、人間や鳩からすべての希望をうばってしまった）と（永久に箱舟からでるな！）という二つの言葉に端的に示されている。

『レベル・セブン』において洪水は核戦争を引き起こし、世界を破壊してしまったのは他ならぬ人間なのであり、この点、創世記のノアとは決定的に異なる。ノアは（各種の鳥、各種の獣、各種の地に這うものをみな二匹ずつ）を方舟に乗せたのであり、方舟の神話から平和の象徴となつた鳩までを全滅させるようなことはしない。洪水は核戦争を生み出したのは、神のような超越的な何かではなくどこまでも人為であるということ。したがって、神の怒りがおさまつた後にもたらされるはずの赦しが、決して訪れないことは創世記との大きな違いである。創世記では、洪水がおさまつた後、神はノアとその子らに次のように語りかける。

「ふえかつ増して、地に満ちよ。すべての地の獣、すべての家畜、すべての天の鳥、みな君たちを恐れ、君たちの前におののくだらう。それらを、すべての地に動くもの、すべての海の魚とともに君たちの手に与えよう。生きて動いているものはみな君たちの食糧にしてよろしい。緑の青草と同じようにすべてのものをわたしは君たちに与える。（略）御覽、わたしは君たちと、そして君たちの後の子孫と、わたしの契約を立てよう、また君たちとともにいるすべての生きもの、

君たちとともにいる鳥、家畜、すべての地の獣、箱舟から出たすべてのもの（「地のすべての獣に」と。今後ふたたび洪水によってすべての肉なるものが絶たれることはなく、地を滅す洪水がふたたびおこらないという契約をわたしは君たちと立てる」。

「旧約聖書創世記第九章」<sup>14</sup>

神との契約という物語は、人間が他の生きものを支配することを正当化するという機能を持つている。神による世界の破壊と再生とがセットになって、その中で選ばれた（義しい人）としてノアの一族が救い出されることによって永遠の契約は成立する。しかし、『レベル・セブン』の洪水＝核戦争の場合、世界を破壊した人間にはいかなる赦し＝救済装置もない。（永久に箱舟からでるな！）という「男」の言葉にはそのような救いのなさが示されている。

自ら世界を破壊し、その赦しもないという寄る辺ない身の上となった人間はどこへ向うのか。『レベル・セブン』の結末は、それを暗示するものになっている。レベル3・4・5・6と、上部の核シェルター群が次々に死滅していき、最後にレベル・7も電力供給用のリアクトル（原子炉）が吐き出す致死量放射能のために全滅してゆく。最後に主人公「ぼく」は次のように手記をつづる。

ぼくは死んで行く、そしてぼくと共に世界も死んで行く。

ぼくは地球上さいごの人間なのだ、ホモ・サピエンス唯一の生きのこりなのだ。「智慧」があるよ、まったく！

ここにいるときさびしい。誰か話しかけられる相手がほしい。

戦場におきざりにされた兵士でも今のぼくのように淋しく感じたことはあるまい。彼は仲間のことを、家族のことを——彼の生命をささげた人々、あるいは彼がそう思った人々——のことを、考えることができた。だがぼくには生命をささげる人がいない。考える対象になる人がいない。みんな死んでしまったのだ。外にも誰もいない、昔の敵の壕にもいない、レベル・7にもいない。

死ぬときにはだ誰でもこんなに淋しく感じるのだろうか。まわりに家族や友人がいればちがうのだろうか。いてくれたらと思う。（略）

もうこれ以上書けそうにない。しかし何とかやってみなくては。これがぼくと——今まであったもの——とをむすびつけるきずななのだ。

太陽があった。太陽はいま今でも輝いているだろうか。

ぼくには部屋の向う側にある時計がみえない。しかしまだ明るい。いや。くらい。

目が 見えない あ—— 友よ みんな お母

さん 太陽 ぼくは ぼくは (二〇月二日)

最後の生き残りとなった「ぼく」には命をささげる相手どころか、考えの対象になる人間すらいない。「命をささげる相手」とは、極限状況において人間が自分の生に意味を見いだす最後の前提（最低条件）であるといえるだろう。考えの対象になる人間すらいなくという「ぼく」は、自分の生を意味づける前提さえ、決定的に失っているのである。神という超越者による意味づけも、人間による意味づけも拒まれた生（あるいは死）、これほどの孤独が

あるだろうか。

核シエルターで生き延びた人間に突きつけられるのは、そのよ  
うな意味づけの前提を剥奪された生（あるいは死）である。方舟  
の比喩を用いて核シエルターを描く物語は、洪水と核戦争、方舟  
と核シエルターとのずれを示すことによって、生の意味づけの前  
提をも破壊する人間の救いのなさを浮び上がらせているのであ  
る。

\*

\*

核シエルターがそのような救いがたさを浮び上がらせる独特の  
場たりえるのは、その持つ排他性に深く関わっているようであ  
る。大江健三郎『洪水はわが魂に及び』<sup>15</sup>はその問題に深く切り  
込んでいる。この小説で描かれる核シエルターは、先の新聞記事  
で見たような市販のホーム・シエルター<sup>16</sup>であるが、その主人・  
大木勇魚は少年グループ「自由航海団」が核シエルター内に侵入  
してきたとき、次のように考える。

シカシ他人ドモニ、オレタチヲ救助シテクレ、トイウ権利ガ  
オレニアルダロウカ？コノ避難所カラソノヨウニ大声デ叫ブ  
コトガデキルダロウカ？オレハ全世界ノ他人ドモト縁ヲキッ  
テ、イワバカレヲ核戦争ノ熱ト爆風ト放射能ノナカヘ突キ  
放シテ、自分ト息子ダケ核避難所ノウチニ閉ジコモツテイル  
人間ナノニ？モシソノ救助ガオコナワレタトシテモ、今度ハ  
アイツラノカワリニ全世界ノ他人ドモガ、ココニハイリコン  
デクルコトニナルダロウ、とかれば「樹木の魂」「鯨の魂」  
にむけていった。

（第四章）

勇魚も核シエルターが他の人間を排除するものであることを自覚し

ているが、このシエルターの特質は、全世界を閉め出そうとする  
ものではない、というところにある。勇魚は、地球の王はヒトで  
はなく樹木と鯨であるという信念を持っており、核シエルターの  
底に開けた穴に素足をのせて「樹木の魂」「鯨の魂」と交信する  
ために瞑想を続けている。

——原・水爆がおちて東京が全滅しても、自分たちだけは  
生き延びる地下壕というから、厭らしいと思っていたけれど  
も、これは外で人間が走り廻っているあいだも、地面に足を  
のせてじっとしている場所ね。すっかり逆だわ、ひとりだけ  
生き延びようというのは。うまくいえないけれども……

（第六章）

『洪水はわが魂に及び』の核シエルターは、人間が地球の支配者  
であるということを否定するために、人間だけを閉め出す目的で  
用意された場所になっている。シエルターの底に開けられた穴は、  
外部と交信するためのものだが、その外部とは、樹木と鯨という  
人間によって滅ぼされようとしている生き物たちの代表者たちな  
のである。

勇魚にとつては、核戦争は人間と樹木・鯨の位置が交替するた  
めの契機であるのだが、物語の結末において水はまさにその交信  
用の穴から核シエルター内に湧き出してくる。

鯨の録音の背景をなす海洋の水音にかきわて、もうひとつ  
のゴボゴボいう水音が濡らす。勇魚は椅子から立ちあがり懐中電  
燈の光を投げて、瞑想用の足場の四角な地面から泥水が激し  
く湧きおこっているのを見た。放水車から大量にそそがれた

水が避難所の背後から基盤に潜りこみ、ここから噴出してゐることは確かだが、それにしてもすでに踝をひたすほどの、この水勢の猛だけしさはどのような流体力学的関係にもとづくだろう？しかしその疑いも宙ぶらりんのままで、そして無だ。(略)それにしてもいま地上ではなにが起つてゐるのか？この切実な恐ろしい疑いは、核シェルターで生き延びる人間にあたえられる新しい宿命だった。核シェルターの力によつて核攻撃に耐え得ても、地上で核爆弾がどのような結果をもたらしているかを、内側から把握する手だてはない。幾メガトン規模の核爆弾がおとされたのか？局地的な核戦争にとどまつたのか、世界最終戦争にまでエスカレートしてしまつたか？自分たちより他に、はたして人類は生き残つてゐるのか？もつと樂觀的な者たちにも、二次放射能の大きさを内側で計算することができない以上、いつ地表に出て行つていゝかを決定する根拠はない。勇をふるつて地上に出るにしても、それは絶望的な賭けの勇氣である。(第二章)

核シェルター内部から外部を知る手立てが全くないまま、そしていつまでそこに留まらねばならないのかもわからないままに生き続けねばならないという「核シェルターで生き延びる人間にあたえられる新しい宿命」には独特のおぞましさがある。そのようなおぞましさに向ひ合つた勇魚は、最終的には人間として樹木と鯨に裁かれる役割を引き受ける。

地上デハナニガ起ツテイルノカ？オレガ地下壕ニ潜ツタ後、核爆発ガオコツタノカ、ソレヨリナオ巨大ナ地殻ノ變動ガオコツテ、地上ニハ津波カ大洪水ガオトズレタノデハナイ

カ？核シェルターノ内部マデ、ステニ膝ヲコエルホドノ水ダカラ。コノ大イナル水ハ人類ヲ滅亡サセ、人類ニヨツテ絶滅ノ危機ニ瀕セシメラレテイタ鯨トモニハ蘇エリノ力をアタエ、イマヤ巨鯨ノ大群ガ地上ノ僚友、樹木群ノアイダヲ遊泳シテイルノデハナイカ？(略)オレハ鯨ト樹木ノ代理人ヲ僭称シテキタガ、イマ地上ニモソノ覇權ヲウチタテタ鯨トモハ、水ノ上ニ梢ヲソヨガセル樹木ニタイシテトハ逆ニ、オレヲ一箇ノ敵ト見ナスダロウ。オレ自身ガソレヲ希望スルノダカラ。

(傍線原文・第二章)

鯨と樹木の代理人を自認してきた勇魚が、ここで人間の役割を引き受けることにどのような意味があるのか。人間の役割を引き受けることは、人間として破壊の責任を負い、樹木と鯨とに裁かれることを選ぶことを意味する。人間が樹木と鯨とに裁かれるという構図をノアの方舟の図式で整理すれば、人間が他の生きものたちから罰を受けるということになる。「洪水はわが魂に及び」においては、そのような洪水の受け止め方、あるいは人間の否定の仕方が、核シェルターへの浸水というかたちで形象化されている。この核シェルターは、人間を他の生きものから裁かれるものに組み換えて物語ることによつて、他の生きものの裁きを受け入れるしかないような人間の閉塞的な在りようを浮び上がらせる機能を持つてゐる。

\*

\*

安部公房『方舟さくら丸』<sup>17</sup>は、核シェルターの排他性を前提としながら、誰が生き残るべきなのかという選別の持つ問題を前景化していることに特徴がある。主人公モグラは、採石場跡地に

巨大な核シエルターを建造し、核戦争後に新しい秩序を持った集団を組織しようとして収容員を探しているが、その選別自体が国家制度によって世界を分割し、核開発競争にまでいたつてしまつたシステムと変わるところがないことに気づき、核シエルターで生き延びること自体に意味を見いだせなくなつていく。

しかし考えてみると、無意識のうちにぼくが取つてきた行動と、瓜二つなのだ。「生きのびるための切符」を売りしづつていた、あの消極性との類似を指摘されると、反論の余地がない。(略)「ほうき隊」を非難する根拠は失われてしまつた。

その前に自分を非難し、ひねりつぶしてしまいたい。(二三)この小説に描かれる核シエルターの特徴は、それが偽装Ⅱさくらの核シエルターⅡ方舟になつてゐることである。物語の結末近くで窮地に陥つたモグラは、ひそかに核戦争の勃発を偽装し、核シエルターを脱出する決意をする。核シエルターに残ると言うサクラとの間に次のような会話がある。

「外の世界は今までどおりなんだぜ。核戦争なんて出まかせの嘘つ八なんだ。嘘を承知でこんな所にいられるわけがないじゃないか」

「でも、本当だと思えば、本当みたいな気もしてくるよ。あなたも言つていただろう、いずれは本当になるんだつて。核戦争つてやつは、始まる前から、始まつてゐるんだつて……」

(略)

「行こうよ、冗談を言い合つている暇はないんだ」

「いや……やはり遠慮しておこう。何処でどう生きよう、つたいして代り映えはしないよ。それに本来、嘘を承知ではし

やいで見せるのがサクラだろ」

(二四)

偽装の核戦争に対抗して出現する偽装の核シエルター。核戦争が偽装であることを自覚しながら核シエルターに留まるという選択の根底にあるのは、核戦争というものが本来偽装として機能しているという確信である。軍事シミュレーションを先行させ、核開発を行うことによつて、核保有国が得ていた効用は、実際の物理的な攻撃に用いる核ではなく、核攻撃の可能性に対する恐怖によつて相手を抑止するという、いわば心理的な要素によるところが大きい。冷戦末期に出現した過剰殺戮と呼ばれるような、数十回も全世界を焼き尽くせるほどの核兵器を開発するという状況は、現実的な核攻撃の場面だけを想定すれば、明らかに造りすぎであり、その管理のコストを考えれば不合理なことである。それでも過剰殺戮が可能なほどの核兵器が開発されたのは、実戦的な兵器として核を用いるよりも、その破壊力への想像力を利用して相手を圧倒し、抑止するという効用があつたからである。

偽装の核シエルターⅡ方舟にとどまるというサクラの選択は、そのような偽装の核戦争によつて、危うい均衡を保つというシステムに依存して生きることが意味しており、そのような意味においては、現在もつとも一般的に受け入れられている生き方の戯画であると言える。

『方舟さくら丸』は、偽装の核戦争によつて均衡を保つというシステム自体を相対化する。核シエルターⅡ方舟を脱出してモグラがどりに着く場所は、決して(今までどおり)の世界ではないのである。

合同市庁舎の黒いガラス張りの壁に向つて、カメラを構え

てみる。二十四ミリの広角レンズをつけて絞り込み、自分を入れた街の記念撮影をしようと思ったのだ。それにしても透

明すぎた。日差しだけではなく、人間までが透けて見える。

透けた人間の向こうは、やはり透明な街だ。ぼくもあんなふうに透明なのだろうか。顔のまえに手をひろげてみた。手を透して街が見えた。振り返って見ても、やはり街は透き通っていた。街ぜんたいが生き生きと死んでいた。誰が生きのびられるのか、誰が生きのびるのか、ぼくはもう考えるのを止めることにした。

(二二五)

透明な街が感じさせるこの存在の希薄さは、偽装の核戦争を支えとする世界の危うさからくる存在の不安というべきものから生まれている。現代における方舟が、嘘（非本来的）なものであることを自覚しつつ留まる場所ではないという認識に立てば、（街ぜんたいが生き生きと死んでいた）という死に満ちた世界のイメージも現実的なものとして迫ってくるだろう。偽装の核戦争と偽装の核シエルター＝方舟によって生き延びようとする倒錯し転倒した人間の在りようと、そのようなシステムによって組み立てられた世界の構造そのものが、この透明な街の表象を通じて問題化されているのである。

以上のように、方舟の比喻を用いて描かれる核シエルターは、方舟神話の構造やイメージを組み換えながら、核によって世界秩序を保とうとする人間の姿を受け入れがたいものとして物語る場になっている。核シエルターという文学空間は、核弾道のネットワークを張り巡らせ、身動きが取れなくなった人間の、赦（ゆる）しも意味づけも得難くなった閉塞感を可視化させ、問題化する機能を

持っているのである。

## 注

1 米国・ソ連の核兵器の数

年	米	ソ
1945	6	0
1950	369	5
1960	20434	1605
1970	25742	11643
1975	26675	19443
1980	23387	30062
1981	22654	32049
1982	22585	33952
1983	22902	35804
1984	23051	37431
1985	22941	39197
1986	22995	40723
1987	23167	38859
1988	22705	37330
1989	21767	35817
1990	20684	33515

2 黒沢満『核軍縮と国際平和』（一九九九年一〇月 有斐閣）より  
米国技術評価局編『米ソ核戦争が起こったら』（西沢信正他訳 一

九八一年七月 岩波書店）一〇一頁～一〇五頁。

3 英国の核シエルター事情についての報道には「英国 脚光浴びる  
家庭用核シエルター もしもの場合の備えに市販」（朝日新聞）一  
九八〇年三月二一日）がある。

4 この約二〇年という時差がなぜ生まれたのか、ということが第一  
一回原爆文学研究会（二〇〇四年七月三日）での研究発表に続く質  
疑のときに話題となった。その際、「米国においては核開発と核シ  
エルター」の建造はセットになった戦略だった。核戦争になってもど  
ちらの国民が生き残るかという発想から核シエルターが作られたか  
ら、核兵器を持たなかった日本では、核シエルターもあまり作られ  
なかったのではないか」との指摘をいただいた。

5 同じように核シエルターがまねく思想的な危険性を指摘した記事

に「シエルターより軍縮 来日中の SUPRA 理事長に聞く」(朝日新聞 一九八二年五月二一日)、「シエルター 「防 護よりも「抗議」を」(同一一九八二年六月六日)、「核シエルター 疑問の多い効用 建築家の反核シンポで安易な設置に自戒の声」(同一一九八二年九月 一三日) がある。

また、レイモンド・ブリッグズの絵本『風が吹くとき』の翻訳版出版が報じられるのもそのような文脈においてであった。「むなし核シエルター — 英国の絵本、日本でも人気—」(同一一九八二年七月一九日)には《最新作 「When the Wind Blows」 (風が吹くとき) は、三月にイギリスで出版され、ヨーロッパでの反核運動の高まりを背景に、たちまちベストセラーになった。(略) 今月初め、日本語の初版(千四百円) 八千部が出ると、十日ほどの間でほとんど売り切れ、現在再版中」と報じられている。

6 映画「THE DAY AFTER」(米国 ABC テレビ製作) は、一九八三年一月二〇日に全米で放映、四六%の視聴率を上げた。日本では一九八四年一月一四日に劇場公開。引用の記事からもわかるように、公開前から関心を集めていたようである。

大江健三郎は「破壊されえぬことイデオログアヒビリティの顕現へ向けて」『小説のたぐらみ、知の楽しみ』(一九八五年四月 新潮社) 所収) の中でこの映画について次のように述べている。「現在、僕はカリフォルニア、バークレイの大学で暮らしているのですが、たまたま全米ネットワークの ABC テレビが放映した、核戦争を近未来の出来事として描く映画を見たこと。それによってあらためて喚起された思いがあるのです。当のテレビ映画『その後の日』ザ・デイ・アフターは、いかにもあきらかに未来の経験の、未来の世界のモデルを提出するものでした。

そしてこのテレビ映画の放映とそれ自体の内容、また放映後すぐ行われた同じチャンネルでの討論会や、新聞各紙の反響を見て行く過程で、僕は実際さきに引用した文章に立ち戻って考えることがあったのです。

テレビ映画自体が、芸術として秀すくれていたか、つまりわれわれの期待の地平を超えて、新しい喚起力を持っていたかというならば、それはそうでなかったと思います。アーカンソーが映画の舞台ですが、アメリカ中南部の農作地帯の住民が見る、近接地のミサイル・サイロから、核弾頭付きの大陸間弾道ロケットが白い噴煙を発してうち出されて行く、日常性のなかに割り込んでいる核戦略システムシステムの奇怪な実体と、爆弾がきれいな条痕じょうこんをのこして去って行ったあとの恐怖にみちた悲哀というものは、テレビ映画を見まもる者に共有される感情でした。つまりそれらのシーンは、芸術表現のひとつのまとまりとして、確実に分節化されていると思われました。したがって、ヨーロッパ情勢の緊迫から地下室にシエルターを準備していた家長が、こちらは核戦争の勃発にも影響されぬように——あるいはそれゆえにこそ、すなわち人類最後の、一家の主婦のつとめとして——もっとも日常的なベッドづくりに熱中している妻を避難させようとし、言葉にしたがわぬ彼女を引きずりおろすシーンで、妻が発する叫び声は迫力いっぱいのものでした。男たちが支配している社会・世界の行きついた所への、女・母性による根源的な批判の、悲しみ悶える叫び声として、それはこちらを打ちのめす力となえていたのです。

そのようにして核兵器の爆発に一瞬にして消滅し、あるいは放射能にさらされて苦しみつつ死に到る民衆が、核状況の中心に位置す

る者らでなく、周縁に押し出された者らであり、かつ世界じゅうの民衆がいまや同じ周縁にあるということも、否応なく納得されるところでした。しかも、周縁にあるから世界規模の戦争の業火をまねがれているというのではなく、まったくその逆であり、周縁にあるものこそまさきに核の火に焼かれる——ワシントンにもクレムリンにも巨大核シェルターはあります——ということも、手応えのある実体として表現されているのです。

核攻撃にさらされる民衆の周縁性ということで、記憶に残った作中の会話があります。ヨーロッパで東西緊張が高まっているという報道のいちいちに、核戦争の危機が増大していることを読みとるほかない状況のなか、いやアーカンソーは「なんでもない場所」だから安全だという声に、次の反駁があびせられるのです。「Nowhere」  
There is no nowhere any more.「ユートピア、という言葉のなりたちをギリシア語の「Ou, not + topos, a place」と辿りなおせば、おおいに「もはや高地なし」を念頭においているはずの右の台詞は、もうすでにどこにもユートピアはない、と聞きとれるようにも思ったのです」。

7 他に核シェルター人気を報じた記事としては、「日本も核シェルター時代!? 防災展に初登場 企業、「大型」開発へ本腰」(「朝日新聞」一九八二年一月一〇日)、「京の寺に核シェルター 僧だけ生残つていいのか 僧にも身守る権利」(同一一九八四年一月二八日)、「公共事業に狙い」(同一一九八四年三月三〇日)、「生へのジグソーパズル 都市の肖像 急増する核シェルター」(同一一九八四年五月一八日)、「続 家族でぶらり 核シェルター」(同一一九八七年二月一九日)がある。

8 このような書籍として、直木公彦『核戦争 それでも、あなたは

身を守る!』(一九七七年三月 サンケイ出版)、東方雄雄『ザ・地下室<sup>シェルター</sup> 安全・快適・サバイバル』(一九八二年四月 創拓社)がある。これらに先立ち、織部智男『シェルター 第一巻 基礎知識——原子戦争下における生存の可能性——』(一九六七年四月 織部)が発行されている。この書籍の末尾には、「シェルター 全十巻」の構成が掲載され、『シェルター 第二巻 基礎理論——原子戦争下における防禦の可能性——』の予告も折り込まれているのだが、時期尚早だったためか、第二巻以降は発行されなかった。後年、織部智男『シェルター 利用技術——生きるに値するもののために——』(一九八八年六月 織部事務所)が発行されている。

9 ひらまつつとむ『飛ぶ教室』(週刊少年ジャンプ)一九八五年二四号—三八号)は、十五少年漂流記の核戦争サバイバル版のような設定の物語。小学校の校庭の地下に作られた核シェルターが舞台になっている。

10 『核シェルターじわり浸透 チェルノブイリから1年』(朝日新聞)一九八七年四月二五日)

11 「冷戦後 92アメリカ社会 シェルター いまや「身近な防災用」(「朝日新聞」一九九二年四月一七日)、「米・口の核シェルター 維持にも巨額の金 機能失われ倉庫に」(同一一九九四年一〇月二四日)。

12 Mondcaei Roshwald/Lenzl Seven (London,Heinemann,1959)引用は、モルデカイ・ロシュワルト『レベル・セブン』(一九六〇年九月 小野寺健訳 彌生書房)による。

13 『レベル・セブン』に描かれる核シェルターは、第一—七地下壕までの七層構造になっている。各層についてまとめると次のように



なる。

レベル1：一般市民、一〜百万人を収容。食糧一ヶ月分。深度十から六十フィート。

レベル2：社会的不適応症者（平和屋・反対屋・社会批評家）を収容。二万五千×四十二ユニット。食糧六ヶ月分。深度百フィート。

レベル3：重要人物収容。二万人×二十五ユニット。食糧二五年分。深度五百フィート。

レベル4：重要人物収容。一万人×十ユニット。食糧百年分。深度千フィート。

レベル5：国家のトップクラスの市民、社会の真のエリート二万人用。自給自足。深度千五百フィート。

レベル6：防衛軍（防衛用）「押しボタンY部隊」。自給自足。深度三千フィート。

レベル7：防衛軍（攻撃用）「PBX部隊」を収容する自給自足の地下壕。深度四千フィート超。

地上における権力関係がそのまま逆さまの階層構造として形づけられているのが、『レベル・セブン』における核シエルト群の特質である。物語は、レベル7にいる押ボタン仕官によってつづられた手記の形式をとっている。

14 引用は『旧約聖書創世記』（関根正雄訳 一九九九年六月 岩波書店）による。

15 大江健三郎『洪水はわが魂に及び』（一九七三年九月 新潮社）。

引用も初出による。

16 この核シエルトは『洪水はわが魂に及び』の冒頭で次のように描かれている。「人類が月から火星をうかがう時代の超音速時間感覚には、遙かな昔に思われるが、アメリカの核避難所ブームにみちびかれて、その規格品を生産・販売しようとする日本人業者がいた。

見本の核避難所が、武蔵野台地の西端に作られた。住宅地の高台から、アシ、スキはいうにおよばず、ブタクサ、セイタカアワダチソウの繁茂する湿地地帯への、<sup>80</sup>勾配の急斜面に、すなわちけわしい崖の根方を掘り崩して、三メートル×六メートルの、鉄筋コンクリートによる地下壕が埋め込まれた。

しかし企業化は成功せず、この国でただひとつ完成された民間用核避難所は、そのまま放置されていた。

17 安部公房の『方舟さくら丸』（一九八四年一月 新潮社）。引用も初出による。

18 モグラは敵対関係にあつた超国家主義的老人グループ「ほうき隊」と自分と同じような行動原理によって核シエルトの要員を集めていたことを知る。なお、詳細は、拙稿「安部公房『方舟さくら丸』論―脱国家主義の可能性」（『近代文学論集』二〇〇一年一月）を参照していただきたい。

**附記** 本論は、第一一回原爆文学研究会（二〇〇四年七月三日 於九州大学六本松キャンパス）での研究発表をもとに、新たに論としてまとめたものである。